The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	図書館スタッフによる学修支援の実践，および事後評価 ： 「プレゼン入門：話す基本技術」
Author(s)	久保山，健；堀，一成；坂尻，彰宏
Citation	大阪大学高等教育研究. 2015, 3, p. 33-43
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/51487
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪大学高等教育研究　3（2014），33−43

【教育実践レポート】

図書館スタッフによる学修支援の実践，および事後評価

～「プレゼン入門：話す基本技術」～

久保山　健[※1]・堀　一成[※2]・坂尻　彰宏[※2]

An Attempt to Support Learning by a University Librarian, and its Follow-up Surveys
"Introduction to Presentation: Basic Skills for Logical Speaking"

Takeshi KUBOYAMA[※1], Kazunari HORI[※2], and Akihiro SAKAJIRI[※2]

This paper describes a basic lecture on presentation as extracurricular education at the Osaka University Library, and the follow-up surveys to the lecture. Many university libraries in Japan have been working on learning support for years. Osaka University Library and the Center for Education in Liberal Arts and Sciences have been cooperating closely to implement writing support activities as extracurricular education since 2010. In 2011, a lecture on logical speaking was launched. The goal of the lecture was learning basic skills for logical speaking. According to questionnaire survey which was carried out after each class, the lecture seemed quite useful for participants. In 2014, the follow-up surveys were conducted to evaluate how beneficial the lectures proved for the participants. It is understood that the participants gained considerable benefit from the lecture. This paper, firstly offers the details of "Introduction to Presentation: Basic Skills for Logical Speaking," and then describes the result of the follow-up surveys. The lecture was delivered by the first author of this paper.

Keywords : Library, Learning support, Education support, Speaking, Introduction to Presentation: Basic Skills for Logical Speaking, Follow-up surveys

1. はじめに

日本国内の大学図書館で学修支援の取組として，かねてより行われてきた文献検索指導を中心とする情報リテラシー教育だけでなく，ラーニング・コモンズの開設やライティング支援，ティーチング・アシスタントや学生スタッフによる学修支援も増えてきた．そこでの課題に対応するために，教員と職員の協働事例も増えている[1)]．

大阪大学では，基本的なアカデミック・スキルを身に付けるため，図書館スタッフと教員が協力し，授業外の学修支援企画として2010年度から「レポートの書き方講座」，「論文の書き方，文献の読み方プチゼミ」（以下，論文プチゼミ）を実施した．2011年度からは図書館スタッフである第1筆者（以下，久保山）が中心となって「プレゼン入門：話す基本技術」（以下，プレゼン入門）を追加した．特に，「プレゼン入門」は図書館スタッフが中心となって，企画・実施してきたことにその特長がある．

本稿では，まず，2011年度から2013年度に実施した

所　属：[※1]大阪大学附属図書館 学術情報整備室　[※2]大阪大学全学教育推進機構
Affiliation : [※1]Osaka University Library, JAPAN
[※2]Center for Education in Liberal Arts and Sciences, Osaka University, JAPAN
連絡先：kuboyama@library.osaka-u.ac.jp（久保山　健）

「プレゼン入門」の実施内容などを概観する．そして，実際に役立ったのかなどを把握するために行った事後評価アンケートの結果を紹介する．

2.「プレゼン入門」の実施概要

「プレゼン入門」は，授業外の学修支援企画として，2011年度から実施した．なお，2012年2～3月と9月に実施した内容などは，すでに拙稿にて報告しているので，重なる部分は簡略に記述する[2)]．

(1)「プレゼン入門」に至るまで

「プレゼン入門」実施の前段階として，大阪大学でラーニング・コモンズが開設されたこと，その場を活用した各種講習会が行われたことがあげられる[3)-7)]．

ラーニング・コモンズは，2009年度に豊中地区の総合図書館，吹田地区の理工学図書館に開設された．「Teaching から Learningへ」というコンセプトも設けられた．図書館では，大学院生であるティーチング・アシスタント（TA）による学修支援も始まった．

各種講習会としては，教員と図書館スタッフが協働する形で2010年度から行われた「レポートの書き方講座」，「論文プチゼミ」の存在が大きい．「レポートの書き方講座」は，1年生を想定し，全3回で構成される．目標はレポートの書き方の基礎を身につけることであり，第2筆者（以下，堀）が内容を構成した．「論文プチゼミ」は，3-4年生を想定し，全4回で構成される．目標はパラグラフ・ライティングを身に付け，論文企画書を発表することである．堀と附属図書館の赤井規晃専門職員が構成した．いずれも授業外の講習会として実施された．

特に，図書館スタッフである赤井が教員との協働体制を作り，図書館スタッフとして内容の構成・実施を行ったことが「プレゼン入門」へつながる契機となった．

(2) 実施目的，背景

「プレゼン入門」の実施目的は，大阪大学の学修支援企画の充実である．その充実のために，大阪大学の学生が人前で論理的に分かりやすく話すことの学修機会が提供できればと考えた．

また，赤井が述べたように大学図書館の教育機能のアピールという意味も含まれていた[6)]．拙稿では，「図書館スタッフが学習支援企画を自らも行うことで，大学図書館の教育機能を考え，大阪大学の教育活動になんらかの関わりを持つ機会が増えることも期待した」（p.78）と述べたが，確かに従来の図書館機能に留まらない視点を持ちやすかったという実感はある．また，大阪大学の全学教育推進機構の教員を中心に，教育改革についての問題意識をある程度共有することもできたと考えている．

(3) 内容

内容は，久保山が構成し，講師も担当した．但し，堀が作成した「論文プチゼミ」の一部資料を共用した．講習当日の補助としても，堀および第3筆者（以下，坂尻）が一定回数の講習に同席した．

到達目標は，（a）話す時のトピックセンテンス，パラグラフについて知る，（b）話す時に必要な要点のヒントを身に付ける，とした．これは，2013年度まで変えることはなかった．

2011年度から2013年度の実施記録を表1に示す．大きく分けると6期に分けて実施し，徐々に内容を充実させた．

表 1　実施記録

時期	回数	有用度	
① 2012.2-3	基本編2回 × 4	4.50	
② 2012.9	基本編2回 × 2 ＋ 発展編1回 × 1	4.56	発展編追加
③ 2013.2-3	基本編2回 × 6 ＋ 発展編1回 × 2	4.64 オール5：6コマ	複数地区で開催
④ 2013.5	基本編2回 × 1 ＋ 発展編2回 × 1	4.68 オール5：最終回	授業期に開催、発展編2回化
⑤ 2013.9	基本編2回 × 2 ＋ 発展編2回 × 1	4.79 オール5：3コマ	
⑥ 2014.2-3	基本編2回 × 6 ＋ 発展編2回 × 2	4.62 オール5：3コマ	複数地区で開催

第1期の2012年2月は全2回の講習で構成していた．1回目で，パラグラフやスピーチの基本構成を解説し，1分間スピーチで実践する内容とした．2回目では，導入や結びの技術，つなぎの言葉，声やアイコンタクトなどを解説し，再び1分間スピーチで実践してもらった．これらの「型」を意識してもらい，その後の実践に活かしてほしいと期待した．講習を重ねるにつれて，スピーチのビデオ撮影を取り入れることもあった．

この2回で特に強調したのは，3つのパーツから構成されるスピーチの構成例を意識することである（図1）．最初に言いたいこと，あるいはスピーチの全体構成を伝え，そして，その構成例に当てはめていくことで，スピーチが格段に分かりやすくなるからである．

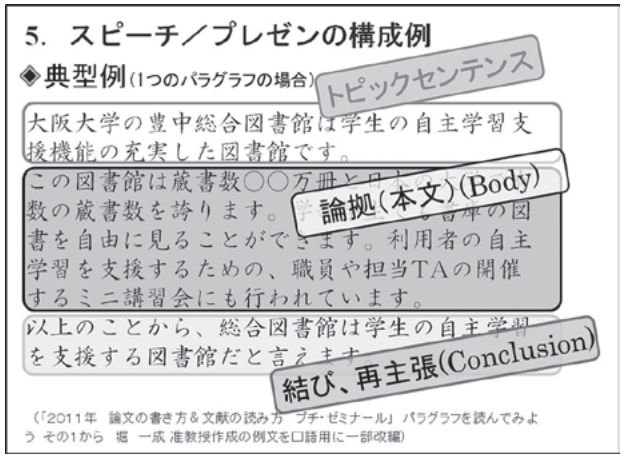

図１　スピーチ／プレゼンの構成例
（「プレゼン入門」で利用した資料より抜粋）

第2期の2012年9月からは発展編を加えた．話す実践の一つである司会についての解説，アイデアを整理するためのブレインストーミングの解説・練習，広い会場でのスピーチ練習，ビデオ撮影を行った．第2期では発展編は1回だけだったが，第4期の2013年5月からは2回構成に変更した．最初に司会の解説を行い，その後の1分間スピーチでは意見交換も含めて，受講者に司会を練習してもらった．そして，一人が話す時間を長くするという理由で，広い会場での発表を想定したスピーチ練習ではなく，3～5名程度のグループに分けて，実習するのが通例となってきた．（写真1, 2）

会場は大阪大学総合図書館のラーニング・コモンズ，グローバル・コモンズを使うことが多かった．発展編の場合は，80名程度収容できる図書館ホールを使うこともあった．

総合図書館以外のキャンパスで行う際は，それぞれの図書館のラーニング・コモンズ，グループ学習室を使用した．

会場選択の条件として，コモンズスペースの活用，講習会の「見える化」，設備，場所の分かりやすさなどがあった．しかし，コモンズスペースを使用する場合，声の聞こえやすさ，周りの騒々しさの点でマイナスに作用することもあった．

内容について配慮した点としては，次のようなことがあげられる．

○解説と実習を交互に行う構成：頭で理解したことをすぐに練習するためである．受講者にとっての単調さを軽減するためでもある．

○実習を相対的に長くする：実習によって身につけるためである．当初から意識はしていたが，アンケートでの要望もあり，より長くするよう心がけた．

写真１　発展編，小グループで司会・スピーチの練習
（図書館ホールにて）

写真２　発展編，小グループでスピーチの様子
（ラーニング・コモンズにて）

○受講者同士の相互評価：受講者の話す機会を増やす目的で，ペアでの練習の時だけでなく，全体練習の際も受講者同士で相互コメントをしてもらった．また，小グループに分けることでさらに話す機会を増やすこともあった．その場合，講師が全てにコメントできなくなることもあった．一方，講師のコメントを求める声が出ることもあり，逆に講師のコメントがほしいかどうかを聞き，そのグループに講師が入るということもあった．

○考慮すべき点を徐々に増やす：「型」を一つ一つ身につけてもらうためである．2回目のスピーチでも内容を変えずに，声など他の部分に配慮するようにしてもよいと伝えることも多くあった．

○難易度も段階的に上げる：これも一つ一つ身につけてもらうためである．苦手意識を少しでも低減してほしいという期待もあった．例えば，スピーチの練習では，ペア練習，座席から立ち上がった状態でのスピーチ，

テーブルから離れて全身が見える状態でのスピーチと変化させた．（写真3）

○各回のアンケートによる改善：各回のアンケートで出された要望は，可能な限り次回から改善するようにした．

○受講者の相互交流：講習の最後に各自の感想を述べてもらうことを徐々に通例とした．これにより，各自の気付きや学んだ点を受講者間でシェアすることを期待した．ペア練習時の相互コメントも相互交流として有用だったと思われる．

写真３　ペア練習の様子（ラーニング・コモンズにて）

なお，実施時期は休業期が多かった．意識的に休業期に実施したというより，他の講習会や久保山のスケジュールの都合によるところが大きい．但し，第4期の2013年5月は授業期に実施した．2月の春休みに実施する際も，学生の動向に配慮し，春休みの直前，つまり試験の終わり頃から実施するようになった．

(4) 内容の元になったもの

「プレゼン入門」の内容を改めて紹介しておく．

「プレゼン入門」は，久保山が1995年から4年前後，学習した英語スピーチがベースとなっている[8]．アジア図書館[9]（大阪市東淀川区）で開催された松中みどり氏の英語クラスである．パラグラフの解説や，一つのパラグラフを英語で話す練習などから始まり，最後には，ロジックやアイコンタクト，声にも配慮した上で，英語での15分スピーチを行うものであった．

そして，2011年7月の大学図書館問題研究会京都支部ワンディセミナーでの松中みどり氏の講演内容も加えた[10]．

そこに「論文プチゼミ」で堀が作成したパラグラフの説明用資料を転用し，全体を構成した．

他に，一部参考にした資料は文末に掲載する[11)12)]．ロジカルに話すことを解説した日本語の書籍は，拙稿での報告以降も，あまり見つけられなかった．

3. 実施結果

(1) 参加人数の推移

前述のように「プレゼン入門」は2011年度から2013年度に6期に分けて実施した（表1）．第1期では基本編2回を4グループ行った（それでも当初予定の2グループを超える申込みがあった）．その後，発展編の追加，その2回化もあったため，第6期の2014年2～3月では，基本編2回を6グループ，発展2回を2グループと，回数・内容ともに拡大した．

参加人数の推移を図2に示す．

参加人数は，2～3月実施分で増える傾向があった．第1期の2012年2月では実人数31名（のべ58名）だったが，第6期の2014年2～3月では実人数43名（のべ120名）と大きく伸びた．全期間では，実人数161名（3-4名の複数期参加者を含む），のべ374名であった．

各回の受講者数の平均は7.1名であった．期別での最大は第4期の2013年5月で平均8.8名，最小は第3期の2013年2月で平均5.7名であった．

なお，参加は任意であり，実施のたびに募集した．2～3月実施の際は，当初の募集枠を超えて応募があり，追加募集することが通例であった．発展編については，当初の2回に参加した受講者から希望者を募る形とした（第4期は発展編も含め，4回1セットという募集をした）．

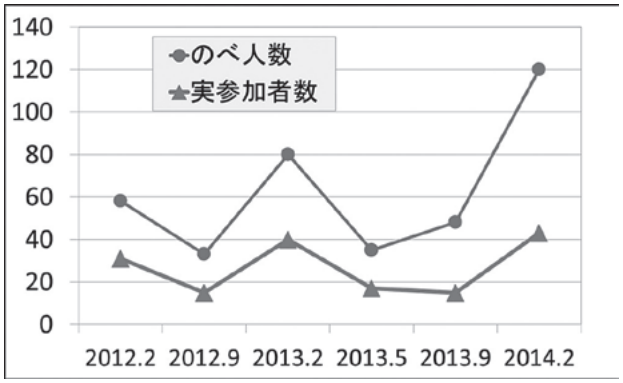

図２　参加人数の推移

学年別の参加比率（第6期，2014年2～3月）を実人数，のべ人数に分けて，図3に示す．比較的1年生が多い．これは概ね共通した傾向であり，6期中4期で，のべ人数は1年生が最も多かった．他は，4年生が最多だっ

たのが1期，修士1年生が最多だったのが1期あった．

実際のところ，大学院生も含め多様な学年から参加があった．各回でその比率は一定ではないが，スキルや経験値に幅があることが多く，内容のアレンジに悩むことも多かった．受講者が難しすぎると感じないように調整しながら進行した．一方で，難易度や内容の充実度について，より高い要望を持つ受講者もいたが，彼らの要望を十分にカバーするのは困難だった．

第6期では，大学院生ののべ人数が相対的に多い．大学院生がより多く発展編まで参加したことを示している．

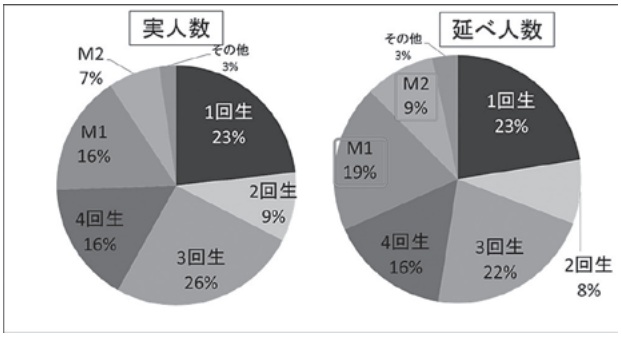

図3　学年別の参加比率

(2) 受講生による評価

各コマ終了時に実施したアンケートでは非常に高い有用度評価が得られた．5（非常に有益）～3（普通）～1（役に立たない） の5段階評価で回答してもらった．各期の平均値は，第1期の2012年2月で4.5だったが，第5期の2013年9月まで右肩上がりで4.79に達した（図4）．

受講者全員が「5」と回答した回も，13回に達する．全53回の25％である（表1）．

他の講習と比較しても，「プレゼン入門」の有用度評価の高さは際立っている．「レポートの書き方講座」では，特定のグループで最高4.59，「論文プチゼミ」でも，2012年実施の平均値が4.60，2013年度実施の平均値が4.36であった．

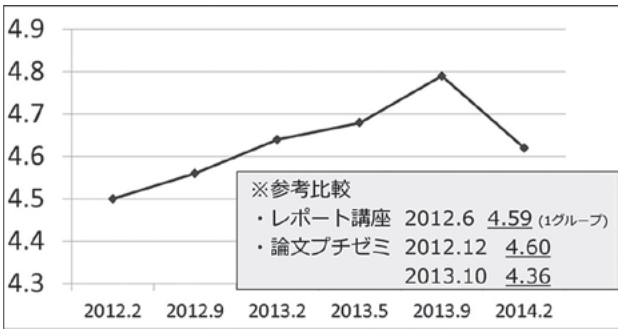

図4　有用度評価の各期平均値の推移

受講者からは「学んだのちに出力できたのがよかった」「型を意識するだけでも，話の筋が分かりやすくなることが分かった」との回答があった（2014年2-3月．回答は一部要約）．

解説と実習の交互構成，スピーチの基本構成が学べたこと，他の参加者からのコメントや実習の様子が参考になったといった回答もよく見られた．

また，発展編の方が比較的，有用度評価の高い傾向が見られた．より積極的な者が受講した結果という面もあるだろう．一方で，そういった受講者が満足する内容だったからという面もあると考えている．

(3) 大阪大学での授業への影響，変化

前述の実施目的として，「大学図書館の教育機能のアピール」，図書館スタッフが「大学図書館の教育機能を考え，大阪大学の教育活動になんらかの関わりを持つ機会」と述べたが，どのような影響，変化があっただろうか．

まず，堀および坂尻が「プレゼン入門」での「型」を用いた自己紹介やビデオ撮影を，自身の授業に取り入れている．また，拙稿で述べたように，堀および坂尻を含め，3名の教員がサポートや聴講に来たことは，教員と職員の協働事例としては興味深いのではないだろうか．ある教員がFacebookで「プレゼン入門」を紹介したことも，大学図書館で実施している講習会としては興味深いエピソードだろう．

他に，ある教員から「プレゼン入門」を1回の授業（90分）で実施してほしいと，久保山に照会があった．しかし，残念ながら，繁忙期と重なったことなどの理由でこれは実現に至らなかった．

実践を繰り返し，学会等への参加・発表など，積極的に発信することで，大阪大学図書館と全学教育推進機構の教員，そして，2013年6月に発足した教育学習支援センターの教員とも人的なつながりも拡大した．しかし，図書館のTAへの拡大は実現に至らなかった．

このように，「レポートの書き方講座」「論文プチゼミ」の流れを受けて，大学図書館による情報リテラシー教育とは異なる形で，大阪大学の教育との関わりを作ることができた．部分的かもしれないが，教職協働の実践により，教育改善のささやかな一歩を進めることができた．

4. 追跡アンケート

各回でのアンケートでは「プレゼン入門」は高い有用度評価を得ているが，事後に役立ったのか，受講者は何が身に付けられたのかなどを評価し，改善のヒントを得るために，追跡アンケートを行った．

結果として，有用度はある程度確認できた．講習中に強調した「型」を意識することは期待通り概ね伝わったと推測できる．他の受講者の実技やコメントも，受講者にとって有用と見なされるという結果も得られた．以下，詳細を紹介する．

(1) 実施目的，方法

追跡アンケートの実施目的は，事後にどの程度役立ったのか，受講者は何を身につけられたのか，講習の各項目の有用度を把握するためである．

追跡アンケートは2回実施した．

1回目は，第5期の2013年9月までの受講者を対象に実施した．期間は，2014年1月10日～1月24日，及びより回答を得るため2月25日～3月12日にも追加で実施した．メールで依頼し，Web上のアンケートフォームに入力してもらった．111名中（不達メール除外），回答は29名（回答率26％）であった．

2回目は，第6期の2014年2～3月の受講者を対象に実施した．期間は，2014年8月12日～8月29日，及び9月9日～9月18日である．方法は同じで，40名中（不達メール除外），回答は17名（回答率42.5％）であった．

合計すると，151名中，回答は46名（回答率30％）であった．不達メールも合わせると157名にアンケート依頼を送信したので，これを基準にすると回答率は29％となる．

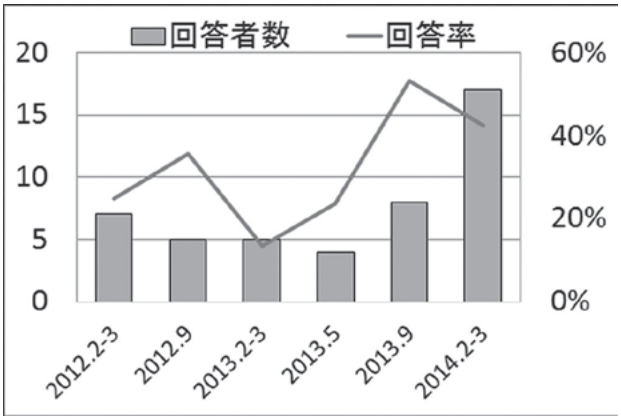

図５　実施時期別の回答者数，回答率

講習参加からアンケート回答までの期間は，半数以上が数ヶ月後であるが，受講の約1～2年後に回答してくれた受講者も約3分の1含まれる．1～2年後に回答があったこと自体,「プレゼン入門」にプラスの印象が残っていることだと推測できる．

追跡アンケートの質問内容は，参考資料[13)14)] を参考に作成した．また，1回目のアンケートについては大学教育学会 第36回大会で報告している[15)16)]．

実施時期別の回答者数，回答率を図5に示す．

(2) 苦手意識の克服に役立ったか

「講習は苦手意識の克服に役立ったと思いますか」を，5（大いにそう思う）～3（どちらともいえない）～1（全くそう思わない）　の5段階評価でたずねた．

回答結果の平均は，4.2であった．苦手意識の克服に一定の効果があったと思われる．

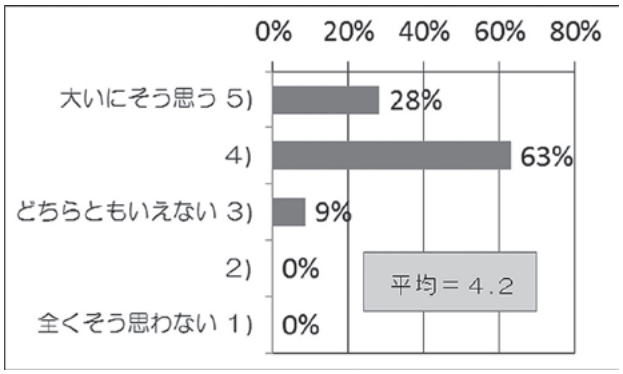

図６　苦手意識の克服に役立ったか

(3) スピーチに対する自信の変化

「受講「前」のスピーチに対する自信はどうでしたか」，及び「受講『後』，講習をきっかけにスピーチに対する自信はどうなりましたか」を，5（自信あり）～3（どちらともいえない）～1（ほとんどない）の5段階評価でたずねた．

回答結果の平均は，受講前が2.1，受講後が3.6であった．スピーチに対する自信の小さい受講者が比較的多かったと言えるが,「プレゼン入門」をきっかけに受講者の自信が一定上昇したと推測できる．

(4) スピーチが上達したか

「講習をきっかけにスピーチが上達したと思いますか」を，5（大いにそう思う）～3（どちらともいえない）～1（全くそう思わない）　の5段階評価でたずねた．

回答結果の平均は，3.9であった．苦手意識の克服よりは若干小さいが，2～4回程度という短い講習にも関わらず,「プレゼン入門」がスピーチ上達という自己評

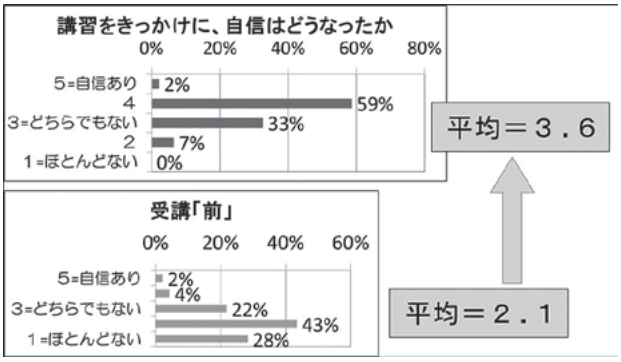

図７　スピーチに対する自信の変化

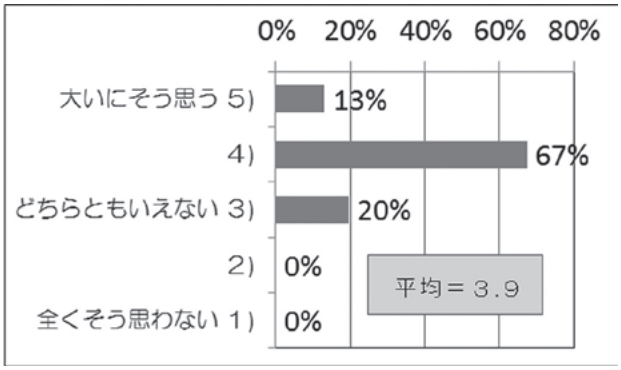

図８　スピーチが上達したか

価の向上に一定の効果があったと思われる．

(5) 実際に講習がどの程度役に立ったか

「実際に話す場面で，この講習はどの程度役に立ちましたか」を，5（大いに役立った）～3（どちらともいえない）～1（ほとんど役立たなかった）の5段階評価でたずねた．

回答結果の平均は，3.9であった．何らかの場面で，実際に役立ったと推測できる．

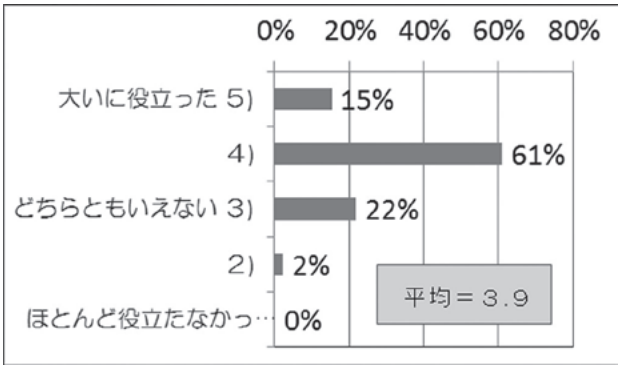

図９　実際に講習がどの程度役立ったか

(6) どのような場面で役立ったか

「役立った方は，どのような場面で役に立ったかお教えください」を，以下の選択肢（複数回答可）でたずねた．

a）授業での発表
b）授業での司会
c）サークルでの発表
d）サークルでの司会
e）その他の場面での発表
f）その他の場面での司会
g）会議や打合せ
h）就活での面接など
i）レポートや論文作成
j）学会発表
その他

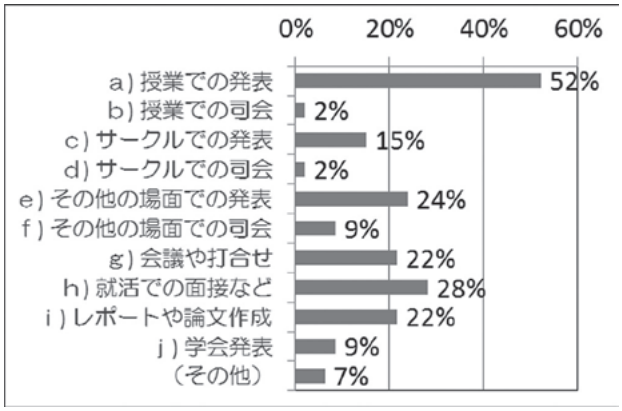

図 10　どのような場面で役立ったか

「a）授業での発表」（52%）が飛び抜けているのは学生の活動として必然だろう．次に「h）就活での面接など」（28%），「e）その他の場面での発表」（24%）が続く．

話す講習にも関わらず，「i）レポートや論文作成」が22％を占めたのは，非常に興味深い．特に，1回目の追跡アンケートでは，31％（9名）の回答者がこの項目を選択している．その9名中8名は発展編でブレインストーミングを経験しているため，その成果と推測できる．一方，第6期の2014年2～3月の受講者で，この項目を選択したのは6％（1名）に過ぎない．回答母数の少なさや，回答者の状況による違いかもしれないが，「i）レポートや論文作成」にも一定の効用があったと推測できる．話す時の構成はレポートや論文作成でも同様だと，講習で触れてもよかったかもしれない．

他に，1回目と2回目の追跡アンケートで大きな違いがあったのは以下のとおりである．これも回答母数の少なさ，回答者の状況の違いが反映されていると考えられる．

a）授業での発表（69%→24%）
c）サークルでの発表（24%→0%）
e）その他の場面での発表（10％→47％）

また，「d）サークルでの司会」，「f）その他の場面での

司会」をあげた回答は少なかった．受講者が講習後に司会をする機会が少なかったためだと推測している．

「その他」には，「塾での作文指導」，「ゼミでの質疑応答」，「普段の会話」があげられた．

(7) 受講をきっかけに，よくなったもの

「受講をきっかけに，以下の中から『とてもよくなった（5点）』と思うものにチェックをお願いします」と，以下の選択肢でたずねた．別の設問で，同様に「『ややよくなった（4点）』と思うもの」もたずねた．

a）自信を持って話す．苦手意識の軽減．
b）構成を意識して話す
c）導入やまとめ，つなぎのやり方
d）声の使い方（大きさ・速さ・間）
e）聴衆の目を見て話す
f）司会のやり方（発展編）
g）ブレインストーミングのやり方（発展編）
h）スピーチについての考え方の理解
その他

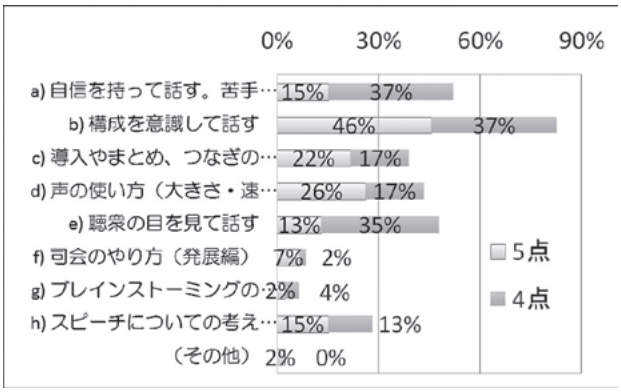

図 11　受講をきっかけによくなったもの

「5点」と「4点」の単純合計で，「b）構成を意識して話す」を選んだ回答者が83％と最も多い．

次に，「a）自信を持って話す．苦手意識の軽減」(52%)，「e）聴衆の目を見て話す」(48%)，「d）声の使い方（大きさ・速さ・間）」(43%)，「c）導入やまとめ，つなぎのやり方」(39%）が続く．

発展編で取り上げた「f）司会のやり方（発展編）」(9％)，「g）ブレインストーミングのやり方（発展編）」(6%）の回答は少なかった．但し，2回目のアンケートに限ると，「f）司会のやり方（発展編）」は18％という結果であった．司会の機会があまりない受講者も多いようだったので，この結果を一概に少ないとは言えないだろう．

講師から最も伝えたかった「b）構成を意識して話す」ことは最初の2回だけでも概ね伝わり，かつ，よくなったという自己評価が多く得られたのは期待通りである．また，最初の2回で取り上げた a)，c)，d)，e）についても，比較的高い結果が得られた．

「その他」には，「スピーチ構成に関する知識の整理」があげられた．

(8) 受講をきっかけに意識するようになったもの

「受講をきっかけに，『以前よりも意識するようになった』ものにチェックをお願いします（上達度と関係なしで構いません）」と，前の設問と同じ選択肢でたずねた．

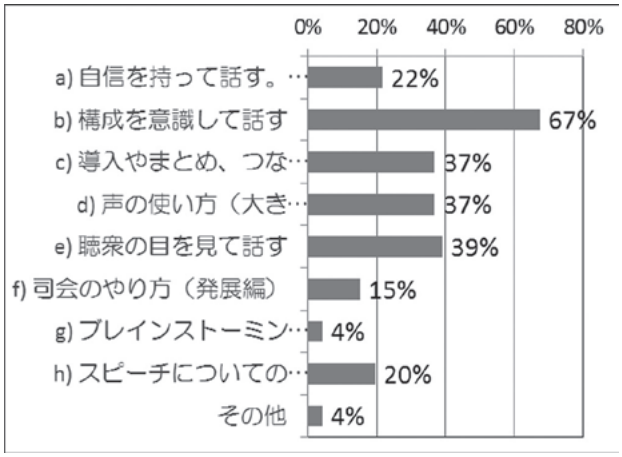

図 12　意識するようになったもの

「b）構成を意識して話す」が最多で，c）～e）に比較的多い回答があった．これも概ね期待通りの結果と言える．

「その他」には，「時間を意識して簡潔に話すこと」，「立っている時の姿勢」があげられた．

(9) 講習や実習で役立ったもの

「解説や実習の中で，以下の中から『とても役に立った（5点）』と思うものにチェックをお願いします」と，以下の選択肢でたずねた．別の設問で，同様に「『やや役に立った（4点）』と思うもの」もたずねた．

a）講師の解説
b）講師のコメント
c）他の受講者のコメント
d）自分の1分間スピーチ
e）他の受講者の1分間スピーチ
f）スピーチ以外の実習（自己紹介，トピックセンテンスを考える，声の練習など）
g）ビデオ撮影（発展編）

h）ブレインストーミングの解説，実習（発展編）
i）司会の解説（発展編）
j）司会の実習（発展編）
k）当日配布の参考資料
L）事後に送られた参考文献リスト
その他

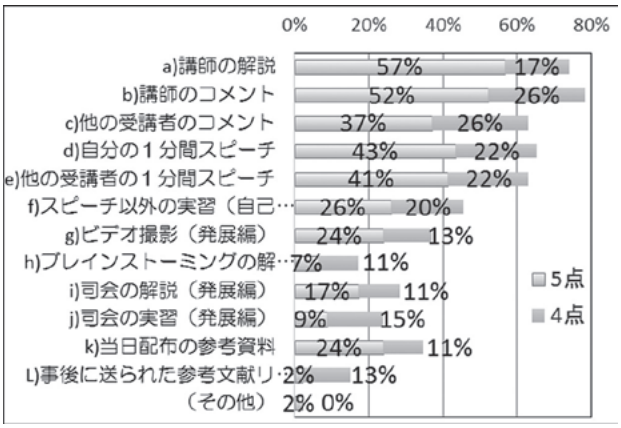

図 13　講習や実習で役立ったもの

「5点」と「4点」の単純合計で，「b）講師のコメント」（78%），「a）講師の解説」（74%）を筆頭に，「d）自分の1分間スピーチ」（65％），「c）他の受講者のコメント」（63％），「e）他の受講者の1分間スピーチ」（63％）が続く．

b），a），d）が上位なのは期待通りである．同時に，他の受講者の実習やコメント（c，e）も同様に有用であったと見なされている．他の受講者の実習が有用というのは，他者のスピーチでの姿勢や，声の早さなどを，自分のそれと比較して参考にしていたようである．

発展編での項目は，前述の「よくなったもの」についての設問では低い回答であったが，「役立ったもの」という観点では，「i）司会の解説」（28%），「j）司会の実習」（24％），「h）ブレインストーミングの解説，実習」（18％）という相対的には高い結果が得られた．発展編の受講者は全体の60％強であることを考慮すると，比較的役立ったと受け止められたようである．

解説を補足するための「k）当日配布の参考資料」（35%）も予想外に役立ったことがうかがえる．

「その他」には，「受講生の人数設定」があげられた．

(10) 改めて有用度評価

「受講後しばらく経過した今の時点で，総合的に見て，本講習の有用度を5段階で評価してください」を，5（非常に有益）～3（普通）～1（役に立たない）の5段階評価でたずねた．

回答結果の平均は，4.1であった．講習直後の結果より低い結果ではあるが，数ヶ月から2年近く経過した後の回答としては，比較的高い数値だと受け止めている．短い講習ながらも，ある程度の知識やスキルが残った結果なのではないかと推測している．

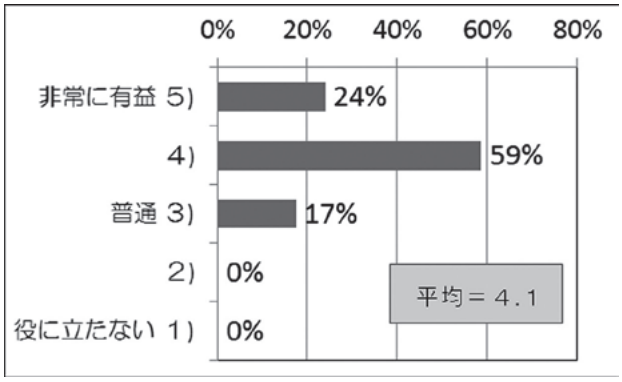

図 14　改めて有用度評価

(11) 自由記述

自由記述から，特徴的な回答をいくつか紹介する．なお，記述は適宜省略・要約しているところがある．学部・学年は受講当時のものである．

(a) 学習機会

「講習内容だけでなく，学んだということが，不安を軽減するのに非常に役立った」（2012年9月，外国語学部1）

学習機会がないから不安が増えること，ある程度学習すれば不安も軽減できることを示してくれている．

(b) 構成，伝え方

「普段相手に伝わらなかったと感じたとき，文章構成について意識して話を変えただけで，ある程度相手が頷く回数が増えた」（2013年9月，理学研究科M1）

「発表内容だけではなく伝える方法も意識することの重要性に気付いたという点で役立った」（2013年2～3月，文学部4）

構成や伝える方法の大事さを実感できたようである．

(c) 役立った経験

「就活面接のため受講したが，卒論の執筆や発表，ディスカッションなど多くの場面で役に立った」（2013年2月，人間科学部3）

「集団面接の際の自己アピールで，他の参加者から，言いたいことがまとまっているね，と言われ，講習が少しでも役に立ったのかなと思った」（2013年2月，文学

部3）

「**企業説明会のグループディスカッションの発表で，事前に心づもりをしていなかったものの，それほど嫌だという気持ちにはならなかった．苦手意識が薄れてきていると感じた**」（2013年5月，人間科学部3）

いろいろな場面で役立ったとの回答が得られた．特に1つ目の回答で「卒論の執筆や発表，ディスカッションなど」とあるのは，多様な学修場面で役立ったことを示している．

（d）発展編

「**話し合いに参加する一人として，どうすれば議論が進むか，司会の人が進行しやすくなるかを考えて議論の場を見る，時には流れを戻すような発言を心がけるようになった**」（2013年2～3月，文学部4）

「**8月，ミーティングの司会の機会で，今までよりも苦手意識を持たずに他の人の意見を引き出すことができたように思う**」（2014年2～3月，工学部3）

受講者の多くは司会の機会があまりない様子だったが，それでも意識の変化や役立った場面があったようである．

各回のアンケートでは，

「**司会は話を聞き，進め方を考え，意見の流れ，気を配ることが多くて大変だと気がついた**」（2014年2～3月，基礎工学部4，法学部・国際公共政策学科1）

「**ブレストの後，トピックセンテンスをすっきりさせることができ，ブレストの重要性を実感**」（2014年2～3月，医学系研究科M1）

と，司会の考慮すべき点や，ブレインストーミングでアイデアを整理する効用を知ったという回答もあった．

（e）その他のプラス要素

「**久保山さんや他の受講者のコメントは印象に残っていたので，その後人前で話すときには毎回参考になっていた**」（2014年2～3月，法学部・国際公共政策学科1）

「**全体的に意識が変わりました**」（2014年2～3月，理学研究科M1）

（f）改善要望

「**実習時（1分間スピーチなど）部外者が時々横を通るのは気になった**」（2014年2～3月，医学系研究科M1）

場所の都合で，コモンズスペース内の人の動線近くで行わざるを得ないこともあった．ホワイトボード等を仕切りのように配置したが，うまくいかないこともあった．

「**ちょっとしたパワーポイントの発表を想定した実習ができると，使う場面が増えると思う**」（2014年2～3月，医学系研究科M1）

熱心な学生や上回生からはこのような要望が聞かれることもあった．しかし，時間的には難しく，可能だとしても，要点を短く伝える程度になっただろう．

「**間隔を空けて，受講日の選択肢がもう少しあればよかった．是非，全てを受講したかったが他の予定があり，残念だったから**」2014年2～3月，人間科学部3）

このような要望はうれしい悲鳴をあげるほどだが，講師担当の久保山の都合もあり，全ての要望に応えることは難しかった．しかし，特に2～3月の時期，追加募集や発展編の追加開催をする際には，可能な限り多くの参加者の都合が付くよう調整した．

（12）追跡アンケートのまとめ

追跡アンケートの結果から，「プレゼン入門」の有用度はある程度確認できたと考えている．事後に実際の場面で役立っていることもある程度確認できた．講習で取り上げた内容も，構成を意識することを筆頭に，受講者に比較的伝わっているという結果が得られた．

このように一定の有用度があった背景としては，次のことが考えられる．1）積極的で同じ課題意識を持つ参加者が集まったこと．2）分かりやすく話すための「型」を学ぶ機会が少ないこと．3）「型」のポイントをパーツに分解して順に提示したこと．4）参加者の相互交流，触発が生まれ，話すことの楽しさも感じることができたこと．

5. まとめ

本稿では，「プレゼン入門」の3年にわたる実施内容を振り返った．そして，追跡アンケートから，実施側の期待する結果が受講者にも得られたことがある程度確認できた．

大阪大学では2013年6月に教育学習支援センターが発足した．関係者との横の連携を深めつつ，情報を共有していきたいと考えている．図書館スタッフも関わりながら，大阪大学の学修支援を充実させていきたい．

一方，2014年4月に，内容の構成・講師を担当した久保山が図書館内の別部署に異動した．職員が学修支援に直接的に関わる時に，よく見られる定期異動は事業化や

継続性の点でマイナスに作用することがある．

この点は，職員制度，異動の運用方法の再検討，図書館スタッフの学修支援活動への関わり方，大学図書館の機能など改めて検討することが必要である．拙稿で久保山が課題として述べたいくつかは，現在も課題のままと思われる．

学修支援活動に対して，図書館スタッフが直接的に関与するのか，パートナーないしコーディネータを目指すのか，あるいは相対的に定型業務の事務として担当するのかは，当面の論点になるかもしれない．大学図書館における学修支援は，当面は流動的に創りあげていく状況である．担当スタッフの能力開発，担当者として期待できる人物の採用，事業としての定着にも年単位の時間が必要である．組織目標も見直しながら，実践を繰り返すことにもなるだろう．そのような状況では，ある程度は属人的に学修支援活動を進めていくことが合理的な面もあるだろう．それによって，前述の実施目的である「大学図書館の教育機能のアピール」,「大学図書館の教育機能を考え」ることに，より近づくのではないだろうか．

最後に,「レポートの書き方講座」,「論文プチゼミ」から始まった教職協働の取組，そして，図書館スタッフ企画・実施の「プレゼン入門」が大学教育の関係者の参考になれば幸いである．

受付2014.11.21／受理2015.02.09

＜謝辞＞

実施前に語学教員の立場で学生の状況を助言いただき，聴講およびサポートいただいたサイバーメディアセンターの竹蓋順子准教授に謝意を表します．また，企画や実施の際，助言や協力いただいた同僚各位に謝意を表します．

そしてなにより，かつての英語クラス等の内容の活用を快諾いただいた松中みどり氏への感謝は言い尽くせない．心から謝意を表します．

参考文献

1） 加藤善子, 小島浩子. 信州大学におけるレポート作成支援 : 図書館と授業との連携の試み. 信州大学附属図書館研究. 2013, 2, pp.125-133.

2） 久保山健. 図書館スタッフによる学習支援の実践 :「プレゼン入門　話す基本技術」. 大阪大学高等教育研究. 2013, 1, pp.77-83.

3） 堀一成. 附属図書館ラーニング・コモンズを利用した教育実践の試み. 大阪大学大学教育実践センター紀要. 2013, 7, pp.81-84.

4） 上原 恵美. ラーニング・コモンズにおける教員やTAとのコラボレーション：大阪大学附属図書館の事例. これからの図書館を考える－琉球大学附属図書館ワークショップ. 2011.2, http://ir.lib.u-ryukyu.ac.jp/handle/123456789/18848 [accessed 2014.11.4]

5） 上原 恵美, 赤井 規晃, 堀 一成. ラーニング・コモンズ : そこで何をするのか,何がやれるのか. 図書館界. 2011, 63（3）, pp.254-259.

6） 赤井規晃. 大学図書館とライティング教育支援. カレントアウェアネス. 2011, 310, pp.2-4.

7） 堀一成. 附属図書館ラーニング・コモンズを利用した大阪大学における学修支援の取り組み. 図書館雑誌. 2012, 106（11）, pp.765-767.

8） 久保山健. 英語学習で学んだスピーチと効果. 大学の図　書　館. 2011, 30（5）, pp.73-76. http://hdl.handle.net/11094/25941 [accessed 2014.11.20]

9） ア ジ ア 図 書 館. http://www.asian-library-osaka.org/ [accessed 2014.11.4]

10）大図研京都ワンディセミナー「伝える技術を磨こう：比較文化の視点で発信力アップ！」のご案内. http://www.daitoken.com/kyoto/event/20110730.htm [accessed 2014.11.4]

11）津田久資, 下川美奈. ロジカル面接術. 2013年基本編. ワック, 2011, 第2章（pp.87-96）

12）平井通宏. エンジニアのための英語プレゼンテーション超克服テキスト. オーム社, 2007, 第5章（pp.74-81）

13）藤木 美奈子, 前川 志津, 勝又 恵理子. スピーチに対する自信は何によってもたらされるか : 授業内容との関係から（II. 基盤教育院における実践）. Obirin today : 教育の現場から. 2010, 10, pp.49-64.

14）藤木 美奈子. 初年次教育におけるスピーチの実践授業を通して － その意義と成果. 大学教育学会第35回大会 発表要旨集録. 2013.6, pp.132-133.

15）久保山健, 堀一成, 坂尻彰宏. 図書館スタッフによる学修支援の実践, および事後評価 :「プレゼン入門:話す基本技術」. 大学教育学会第36回大会発表要旨集録. 2014.6, pp.166-167. http://hdl.handle.net/11094/36154 [accessed 2014.11.4]

16）久保山健, 堀一成, 坂尻彰宏. 図書館スタッフによる学修支援の実践，および事後評価 :「プレゼン入門:話す基本技術」. 大学教育学会 第36回年次大会. 2014.6.1. http://hdl.handle.net/11094/36154 [accessed 2014.11.4]